

聖書：マルコの福音書 4：1～20

説教題：良い地に蒔かれたもの

日時：2025 年 7 月 20 日（朝拝）

イエス様は今日の箇所で有名な「種蒔きのたとえ」を語っておられます。たとえと聞くと私たちは親しみやすいとまず思うかもしれません。たいてい日常生活と関わりの深い材料が用いられますので聞きやすいですし、イメージがしやすい。実際この箇所は子どもに話す際、絵に描きやすいですし、興味も引きやすいと思います。しかし、「ではこのたとえは何を教えているのか」となるとどうでしょうか。私たちは後のイエス様の説き明かしの言葉も知っているため、そのポイントをつかんでいると思いますが、3～9 節のたとえ話を聞くだけでもどうでしょうか。イエス様が語られたのはこんな内容です。「ある人が種まきに出かけ、ある種は道端に落ちた。それは鳥が来て、食べてしまった。別の種は土の薄い岩地に落ちた。それはすぐに芽を出したが、日が昇るとしおれ、枯れてしまった。別の種は茨の中に落ちた。すると茨がそれをふさいでしまった。最後のものは良い地に落ちた。それは 30 倍、60 倍、100 倍の実を結んだ。耳のある者は聞きなさい。」果たしてこれで何が分かるでしょう。たとえのストーリーは分かっても、どんな深い意味やメッセージがあるのか、これだけでは分かりません。

イエス様は 10 節以降でこのようなたとえで語る理由を述べています。11 節後半に「外の人たちには、すべてがたとえで語られるのです」とあります。そこに驚くべき目的のあることが 12 節でイザヤ書 6 章 9 節を引用して述べられています。それは彼らが「彼らは、見るには見るが知ることはなく、聞くには聞くが悟ることはない」ためであると。つまり真理を隠すためです。たとえを聞いて分かったつもりになっても、実際は大事なことを何も悟らないまま終わる。そうして赦しを受けることなく、いよいよ滅びへと向かうためというのです。一方、内側の人たちはそうではありません。内側の人たちとは 10 節で十二使徒とともにイエス様の周りにいた人々です。彼らは 1 節に記された「非常に多くの群衆」とは区別されています。10 節で「さて、イエスだけになったとき」と言われているように、多くの者たちはイエス様のもとを去りました。その後でもそこに残っていた人たちです。あるいは前回見た 3 章 31～35 節で、イエス様の身内の者たちは「外に立っていた」と言われましたが、それと対照的にイエス様の周りに座っていた人たちのことです。イエス様は「この人たちこそ、わたし

の兄弟、姉妹、母なのです」、ご自分の真の家族なのですよと言われました。その彼らも今日のたとえを聞いただけでは意味が分からなかったようです。そこでイエス様に尋ねました。そしてイエス様から説き明かしを受け、それによって深い意味を悟るようになされたのです。ですからたとえは親しみやすいのですが人々を二つに分けるのです。ある人たちはたとえの表面的な意味に満足して、それ以上求めず、いよいよ滅びへと突き進みます。もう一方の人たちはさらなる理解を求め、それによってたとえが語る深い真理に生かされ、いのちの道を歩む。ここで大切になるのはイエス様とともにいるということです。イエス様のそばにとどまり、イエス様との交わりの中で、その深い意味を教えてくださいにすることです。イエス様は「このたとえが分からないのですか。そんなことで、どうしてすべてのたとえが理解できるのでしょうか」と言いながらも、親しく説き明かしてくださいます。

イエス様は 11 節で「あなたがたには神の国の奥義が与えられていますが」と言われました。この神の国の奥義とは何でしょうか。「奥義」という言葉のギリシャ語はムステリオンで英語のミステリーのもとになった言葉です。ミステリーというと神秘的なもの、人間には理解できないものというイメージを持つかもしれませんが、聖書における「奥義」とは「以前には隠されていたが、今や明らかにされたもの」を指します。それは一言で言えばイエス・キリストの福音のことです。神の国はイエス・キリストにおいて実現・到来し始めているということです。このキリストの内に神の国の祝福にあずかるためのすべての鍵があるということです。彼らはそれを知る者たちとされて、この時イエス様の周りにいました。この奥義はすでに公開されていますが、それを真に悟っている者はごく一部です。それはただ神の恵みによって「与えられる」ものです。この神の国の奥義を与えられている者、すなわちキリストにおいて神の国は到来し、その恵みが差し出されていることを知り、そのキリストに従う者こそ、このたとえから真の益を受けることができます。そのためになお理解の足りない彼らにイエス様は親しく説き明かしをしてくださいます。私たちもこのたとえの表面的なストーリーを知って満足するのではなく、神の国がイエス様において来ているという光の中で、このたとえから真のメッセージ、その励ましとチャレンジを受け取る者でありたいと願います。

ではこのたとえは何を語っているのでしょうか。まず話の基本となっているのは、これはイエス様による神の国の福音宣教を描いているものであるということです。3

節に「種を蒔く人が種蒔きに出かけた」とありますが、この「種を蒔く人」とは誰でしょうか。第一に考えられているのはイエス様です。そして種は何かと言えば、後の解説の中でイエス様は御言葉だとはっきり仰っています。イエス様はその御言葉という種を色んなところに蒔きます。ある意味で無差別に蒔いています。道端にも、岩地にも、茨の中にも、広く蒔いています。これはイエス様の宣教活動そのものを示しています。そしてイエス様が神の国をもたらすために用いている手段は小さいものです。種は小さく、威圧感もなく、見た目には弱々しいものです。イエス様は軍事力をもって、この世界に神の国を打ち立てようとはされませんでした。あるいは奇跡を通して目の前の人々の必要に答えることはあっても、超自然的な力を誇示して神の国を押し広げようとはされませんでした。むしろ農夫が種を蒔くように、地道に、静かに、しかし確実に働いています。それに対して受け止める人々の反応は色々です。まず記されているのは拒絶の連続です。ある者は全く受け入れず、ある者は一時的に受け入れても実を結びません。こうした人々の反応を見るとイエス様の働きは無駄に終わっているように見えます。実際これまで 2〜3 章にかけて、イエス様に対する反発や敵対が連続して記されて来ました。律法学者やパリサイ人たちはイエス様を非難し、むしろヘロデ党の者と組んでイエス様を殺そうと企み始めました。表面的にはイエス様の宣教は全く失敗しているように見えるかもしれません。しかし、そうではないのです！たとえ多くが拒んだとしても必ず豊かな実を結ぶと言われています。最後の 4 つ目の良い地において、それは 30 倍、60 倍、100 倍になります。これは驚異的な豊作です。イザヤ書 55 章 10〜11 節：「雨や雪は、天から降って、もとに戻らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種蒔く人に種を与え、食べる人にパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰って来ることはない。それは、わたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成功させる。」 このようにイエス様を通してなされている神の働きは必ず勝利するのです。その御心は成し遂げられるのです。神の国とはこのようなものです。たとえイエス様の宣教に多くの障害が立ちはだかり、現にそういう状況があっても、そういう逆境にもかかわらず、イエス様が蒔く小さなみことばの種は驚くべき実を結ぶのです。このことを神の国の奥義を知らされている者たちは、このたとえに見るのです。

しかしただそのことだけではありません。そういう特別な励ましとともにここにはチャレンジもあります。それはあなたはどうなのかということです。あなたはこの 4 つの土壌の内、どれなのか。あなたは実を結ぶ者なのか、それともそうでないのか。

イエス様による神の国の宣教は必ず豊かな実りを得ますが、その祝福にあずかるために私たちに求められているのは、その御言葉に良く聞くことです。たとえの最初の 3 節と最後の 9 節に、繰り返しそのことが強調されています。「よく聞きなさい」、また「聞く耳のある者は聞きなさい」と。ここにこのたとえの強調点があります。

イエス様は聞く態度によって人々の心を 4 つの土地にたとえました。一つ目は道端のような心の人です。道端は人々に踏み固められて固くなっています。従って蒔かれた種を受け入れません。そうこうしている内に鳥が来て食べてしまいます。これはイエス様の解説によるとサタンの持ち去りを意味します。御言葉を聞いたには聞いたのですが、その人に何の影響も与えない内に取り去ってしまうのです。

二つ目は土の薄い岩地のような心の人です。少し土があるので一時的には芽が出ます。すぐに反応し、喜んだように見えますが、根がないために少しの困難で枯れてしまいます。これは言うならば偽りの回心です。伝道集会に参加し、その雰囲気の中で信仰への招きにも手を上げ、信者になったかと思いきや、次に会った時にその人は何も変わっていない。むしろ信仰生活を始めるにあたり、いくらかの困難や迫害のようなことがあると、すぐつまづいて離れて行く人です。

三つ目は茨のような心の人です。この人は御言葉に反応はしますが、その他にも競合するものがその心に色々あって結局御言葉が窒息させられてしまう人です。その茨にたとえられるものとしてイエス様が 19 節であげているのは、まず「この世の思い煩い」、すなわちこの世の生活です。御言葉に良く聞いてイエス様に従うよりも、この世の生活のことで頭が一杯で、信仰の持つ位置がなくなってしまう。また「富の惑わし」もそうです。「惑わし」と言われていますように富は私たちを惑わし得るものです。永遠の命へ導く力はないのに、これさえあれば自分は大丈夫だと偽りの安心感を与えます。富は使い方によって大きな善を成し遂げる手段にもなりますが、聖書で金銭への愛は「あらゆる悪の根」と I テモテ 6 章 10 節で警告されています。「ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました」と。後にこの福音書でも 10 章で金持ちが永遠の命を求めてイエス様のもとにやってくるのですが、結局お金を手放すことができず、イエス様に従うことをやめてしまいます。これがまさに茨です。「そのほかいろいろな欲望が入り込んで」とも言われています。そういう他のことへの関心がその人の中で優先されて結局みことばを追い出し、

その人は実を結ぶことに至りません。

しかし4つ目は良い地にたとえられる人です。その人は御言葉を聞いて受け入れます。すなわちその人の心という土壌にしっかり根を張ります。するとどうなるでしょう。30倍、60倍、100倍の実を結ぶようになります。なおこの「聞いて」「受け入れる」という言葉は現在時制で書かれています。ですから1回聞いたとか、1回受け入れたということではなく、継続的に、絶えず、そうし続けるという意味です。その人には驚くべき実が結ばれるのです。この「実」とは何でしょうか。これは御言葉が生む実ですから、神がご計画し、備えてくださったあらゆる霊的祝福を指します。それはその人の信仰における成長を指しますし、キリストに似た者へと造り変えられて行くことを意味しますし、また良い行いに現れますし、またイエス様とともに神の国の完成のために仕える者となることも含むでしょう。その人はその人がもともと持っていた力をはるかに超えて、神が結ばせてくださる豊かな実りと祝福に生かされる人となるのです。

私たちは果たしてどうでしょうか。良く私たちはこの4つの土地のどれに似ているかと問われ、自分は一つ目にも当てはまりそうだし、二つ目と似ているところもあるし、三つ目に至ってはなおさら、・・・などと言われる時がありますが、最初の3つに当てはまるクリスチャンというものは存在しません。一つ目から三つ目までは実を結ばない人であり、クリスチャンではない人のことです。つまりクリスチャンは4つ目の人でなければなりません。反対から言えば、この4つ目の祝福へと私たちは招かれています。自分を見る限り、そう思えなくても、そういう力が福音の言葉にはあるのです。そういう神の国の力と祝福がイエス様において到来しているのです。

イエス様は「聞く耳のある者は聞きなさい」とたとえの最初と最後で強調されました。私たちは漫然とではなく、御言葉が自分の心という土壌にしっかり根差すように熱心に聞きたいと思います。また内側にいた弟子たちのように、イエス様のそばで、イエス様との交わりの中で親しく説き明かしをいただく者でありたいと思います。今日イエス様のそばで、イエス様との交わりの中で教えていただくとはどのようにすることでしょうか。それはまずイエス様と私たちを結んでくださる聖霊を通してイエス様に祈り求めつつ、へりくだって聖書に聞くことです。11節にあったように神の国の奥義は「与えられる」ものです。私たちの力で理解するのではなく、神の恵みに

よって悟る者とさせていただけるのです。ですからとへりくだりと祈りが必要です。またイエス様から親しく教えられる手段として神が与えてくださっているあらゆる方法を積極的に用いることも意味します。それは礼拝に勤勉に出席することを意味しますし、また教会の様々な集会に出て御言葉を学ぶこともそうです。あるいは個人的に牧師や兄弟姉妹に聞くこともそうですし、神が教会に与えてくださった歴史的な遺産、ウェストミンスター信仰告白等を学ぶこともそうです。私たちはこれらの手段を通して、イエス様のみそばにとどまり、イエス様ご自身から親しく教えられる歩みをして行きたいと思うものです。

御言葉は「種」にたとえられているように見た目は小さく、弱く、軽んじられやすいものです。しかしこれによく耳を傾け、心に受け入れ続ける時、神は驚くべき実を私たちの内に結んでくださいます。私たちはこの種蒔きのたとえを感謝して受け取り、イエス様が今日も蒔いておられるみことばの種を日々喜んで受け入れ、それが自らの心に根差すことを求めて行きたいと思います。そして神の国の力と祝福に自分自身が豊かに生かされ、その証をもって、神の国の福音をイエス様と共にさらに宣べ伝えて行く歩みに仕える者とされて行きたいと願います。